

# フィンランドにおける 「大フィンランド」の文化的表象

－大衆誌『スオメン・クヴァレヒティ』（1918-1944）の分析を通して－

石 野 裕 子

## 1. はじめに

フィンランドには独立以前のロシア帝国統治下の19世紀後半に発生し、第二次世界大戦期終わりまで多くの人びとに支持された「大フィンランド（Suur-Suomi）」<sup>1</sup>という膨張思想が存在した。「大フィンランド」の地理的範囲は論者によって若干異なるが、一般的にはフィンランド人の「近親民族」との連帯を見据えて、彼らが居住するロシア・カレリア<sup>2</sup>などの周辺地域を含めたフィンランドの範囲を指す<sup>3</sup>。ロシア帝国統治期のフィンランド大公国の範囲は本来のフィンランドの形ではなく、「近親民族」の居住地を含めた「大フィンランド」こそが真のフィンランドであるとし、「大フィンランド」の範囲での独立が志向された。この思想は独立する直前から盛り上がりを見せたが、フィンランドが独立を宣言した1917年12月6日時点ではフィンランド大公国の範囲での独立となった。

その独立に不満を抱いた集団は、独立直後に起こった内戦の最中に「近親民族」の主な居住地であるロシア・カレリアへの義勇軍遠征を行い、武力で「大フィンランド」を実現しようとした。内戦終結後も遠征は続けられたが、結局失敗に終わった。ただし、遠征自体はフィンランド国民の大多数によって支持されたものであった。遠征失敗後もフィンランドにおいて「大フィンランド」の思想は学生団体や政治組織などによって受け継がれていき、消えることはなかった。そして、第二次世界大戦期の二度目の対ソ戦時にフィンランド軍が国境を越えてロシア・カレリアに侵入、占拠することによって武力での「大フィンランド」実現の試みが再びなされたのである。

本稿の目的は、以上のようにフィンランドにおいて大きな影響力を有した「大フィンランド」という思想を、軍事的行動の狭間である戦間期から戦時中にかけてメディアがどのように表象していったのかを解明することにある。具体的には「大フィンランド」そのもの、もしくは「大フィンランド」に関連づけられた記事がどのように「大フィンランド」を表象し社会に示していったのかを、大衆誌『スオメン・クヴァレヒティ（*Suomen Kuvalehti*）』の記事の分析を通して明らかにする。

従来、「大フィンランド」はその性質から政治的、軍事的利用の点で論じられており<sup>4</sup>、「大フィンランド」表象は単なるプロパガンダとして切り捨てられてい

る側面が否めない。しかし、独立時に実現できず、独立以降も実現が難しい「大フィンランド」という膨張思想が、戦間期に消えることなく人びとを魅了し続けたのかのなぜかという疑問を解き明かすには、「大フィンランド」がどのように表象され、人びとに浸透していったのかに注目することが必要である。本稿では、その謎の一端を明らかにするために、大衆誌がどのように「大フィンランド」を表象してきたのかを分析する。

ここで本稿が扱う大衆誌『スオメン・クヴァレヒティ』について概略を説明する。同誌はフィンランド独立以前の1916年に創刊され、国内外の社会情勢、経済、政治から文化まで幅広く取り扱う週刊誌である。現在も発刊されており、フィンランド全土で最も読まれている週刊誌である<sup>5</sup>。同誌の特徴は写真が多く掲載されている点で、年間5,000点以上の写真が掲載されている<sup>6</sup>。創刊にあたってはフィンランドを代表する作家ユハニ・アホ、国民的詩人と評されるエイノ・レイノ、民俗学者E. N. セタラなどが筆者として参加するなど教養を意識した雑誌であり、また独立の気運が高まっているなか、時代の流れについていくような読者を想定した<sup>7</sup>。

同誌は政治的中立を表したが、実際にはブルジョア政党側、すなわち保守寄りであった<sup>8</sup>。しかし、政治的主張が全面に押し出される政党誌とは異なり、時代の雰囲気伝えてきた大衆誌である。発行部数も多く、フィンランド全土で読まれてきた同誌の「大フィンランド」表象に注目することで、当時どのように人びとが「大フィンランド」表象を無意識に受容していったのかの一端を明らかにすることができる。それゆえ、本稿では独立後の1918年から第二次世界大戦期に勃発した二度目の対ソ戦争が終結した44年までの同誌の「大フィンランド」表象に関連する記事を分類、分析することで上記の目的を果たしたい。

なお、同誌の分類・分析にあたっては「大フィンランド」に関連した出来事を考慮に入れながら次の3点(1)「大フィンランド」という言葉の有無、(2)芸術運動カレリアニズムとの相違点、(3)「近親民族」との連帯意識とその表象に注目するが<sup>9</sup>、その理由については次章で説明する。

## I 「大フィンランド」の興隆と政治的動向との関係

はじめに、「大フィンランド」とはどのような歴史的背景のもとで発生し、発展していったのかについて概説する。上述したように「大フィンランド」はフィンランド人の「近親民族」、主にカレリア人との連帯感情から発生した思想である。13世紀以来スウェーデンに、1809年からロシア帝国に統治されてきたフィンランドでは、19世紀後半になって民族的自覚が覚醒していくが、その際、同系言語を話すと考えた「近親民族」との連帯思想が同時に広まっていった。

その理由としては、当時、支配階級の言語であったスウェーデン語ではなく、

土着の言語であったフィンランド語を軸に据えた民族運動を展開されていく中で、運動の象徴となったのがフィンランド語の口承詩を書きとめ、編纂された叙事詩『カレワラ (Kalevala)』<sup>10</sup> だったことが挙げられる。『カレワラ』の原詩がロシア・カレリア、すなわちフィンランド域外で主に採集されたことから、その地はフィンランド民族文化の揺籃の地と認知されていった。19世紀後半にはカレリアニズムと呼ばれる文芸運動が最盛期を迎えた。この運動では芸術家たちがこぞってフィンランド民族文化揺籃の地であるカレリアに旅行し、そこでインスピレーションを受けた作品を発表した<sup>11</sup>。

以上のように、フィンランドの民族運動はフィンランド語、「近親民族」との連帯意識及び彼らが居住するロシア・カレリアとが密接に結びついて展開されていった。すなわち、当初「大フィンランド」は「近親民族」感情から発せられたものであり、芸術運動カレリアニズムと結びついて文化的に表象されていったのである。むろん、カレリアへの憧憬やその地に居住する「近親民族」感情自体は政治的思想に直ちにつながるものではないが、フィンランドが置かれた政治的状況の変化によってそれらの感情は政治的思想へと変貌する。

1809年以来、フィンランドはロシア帝国の統治下に置かれ、制限があるものの一定の自治を有す「大公国」として発展してきた。しかし、ドイツ帝国の統一といったヨーロッパの情勢が変化したのを契機に、19世紀後半からロシア帝国はフィンランドの自治を制限する「ロシア化」政策を施行した。ロシアによる自治の侵害を受けて、フィンランド全土で抵抗運動が発生する。その中で、フィンランド人の「近親民族」であるカレリア人が居住するロシア・カレリアは元来フィンランドの土地なのでフィンランドに組み込むべきであるという主張、すなわち「大フィンランド」の正統性が主張されていったのである<sup>12</sup>。この主張の背景には緩衝地帯としてのロシア・カレリアの重要性が背景にあり、単なる民族感情にとどまるものではなかったことに留意したい。

1914年に第一次世界大戦が勃発、1917年にロシア革命が始まり、宗主国ロシアが混乱に陥ると、フィンランドの独立が射程に入った。それは「大フィンランド」支持者にとって、「大フィンランド」の範囲での独立の可能性を示唆するものであった。

結局、フィンランドはロシア帝国時代のフィンランド大公国の領土でもって独立を果たすことになるが、ロシア・カレリアを含めた「大フィンランド」実現の機運は潰えることなく、後述するが内戦の混乱期、軍事力で「大フィンランド」を実現しようとする動きが登場する。

以上のように、「大フィンランド」はその言葉だけで捉えきれない思想で、芸術運動カレリアニズムで表象されたカレリアへの憧憬、さらにその地に居住する「近親民族」への感情こそが「大フィンランド」を下支えする要素であり、それ

らの表象を含めた「大フィンランド」表象に注目する必要性がある。それゆえ、次章では上記に記した(1)「大フィンランド」という言葉の有無は無論のこと、(2)芸術運動カレリアニズムとの相違点、(3)「近親民族」との連帯意識とその表象に注目しながら、どのように大衆誌が独立以降、「大フィンランド」を文化的に表象していったのかを分析する。

## Ⅱ 『スオメン・クヴァレヒティ』における「大フィンランド」表象

### 1 1918年の東カレリア遠征と「大フィンランド」表象

1917年末から18年にかけてフィンランドは政治体制が大きく変化した。その前年の1917年12月6日にフィンランド臨時政府はロシアから独立を宣言し、年末にはロシア革命の最中に誕生したボリシェヴィキ政権から独立の承認を得た。しかし、独立の形態が十分に話し合われないまま独立を宣言したため、翌年1月27日に内戦が勃発した<sup>13</sup>。その内戦の最中である1918年3月から、政府側である白衛隊の一部が義勇軍として、宣戦布告なしに東カレリア遠征<sup>14</sup>と評する軍事遠征を行った。義勇軍はロシア・カレリアの主要都市であるレポラ（レポリ）、ポラヤルヴィ（ポロソゼロ）を占領し、それらの地を独立したてのフィンランド領土内に組み込もうとした<sup>15</sup>。この遠征は、現地住民の支持を得られずボリシェヴィキの抵抗も受け、最終的に失敗に終わったが、1920年に断念するまで継続された。

そのような激動の年に刊行された『スオメン・クヴァレヒティ』にはロシア・カレリアに関する記述がしばしば見られるが、それらは東カレリア遠征を支持する論調となっている。

1918年の同誌に初めて「大フィンランド」に関連する記述が見られたのが、6月22日発刊の第25号の記事「ヴィエナ・カレリアの村に沿って」である。同記事は民俗学者A. O. ヴァイサネン<sup>16</sup>がヴィエナ・カレリアの村を旅し、各村に入って住民たちと触れ合った旅行記である。作者は「大フィンランドの創造は現在懸案となっている東カレリア問題と近い関係にある」<sup>17</sup>とし、「カレワラの歌の地」であるヴィエナ・カレリアの村々を旅した様子を記事にする。

同記事の特徴は、現地の住民を『カレワラ』の登場人物に例えたり、風景を『カレワラ』を描いたフィンランドを代表する画家アクセリ・ガッレン＝カッレラの絵のようだと評したりする点にある。また、「カレリアの人びとはまだスパーレ、ヴィストローム、カリヤライネン、インハの名前を覚えており、よく語られている。」と記している<sup>18</sup>。これらの名前は19世紀後半に興隆した芸術運動カレリアニズムを代表する芸術家たちの名前である。最後にヴァイサネンは、この地では別の言語が話されているが、フィンランドの白い旗がこの地になびいた後にすぐ

美しいカレリアは以前の力を取り戻すであろうと述べる<sup>19</sup>。この記事が掲載された1918年6月は同年3月から10月まで実行されたヴィエナ・カレリアへの義勇軍遠征の最中であり、それを支持する論調で書かれている。

同年8月17日発行の第33号には「ヴィエナの返還」と題した記事が掲載された<sup>20</sup>。副題は「1718年の講和条約に関する歴史的背景」であるが、実際は1721年のニースタット（ウーシカウプンキ）条約に至るロシア、スウェーデン間のフィンランド領土の交渉を、当時ベルリンでフィンランドとロシアとの間で行われている講和交渉、さらに現状の「大フィンランド」の問題に重ねて論じられている。

記事では、18世紀初頭のスウェーデンとロシア間の講和条約交渉を取り上げる。バルト海の覇権をめぐって領土を拡大し続けてきたスウェーデンは、1700年から始まった大北方戦争でロシア、デンマーク・ノルウェー、ポーランド、ザクセンといった周辺諸国を敵に回して戦った。大北方戦争中の1713年から14年にかけて、ロシアは当時スウェーデン統治下のフィンランドの大部分を占領した。この時期から1721年の大北方戦争の講和条約であるニースタット条約締結までの時代を、フィンランドではロシア軍の暴虐ぶりを称して「大いなる怒り（Iso Viha）」の時代と呼ばれている。

記事では、1718年春にスウェーデンとロシア間で講和が開かれた際に、白海、オネガ湖、ラドガ湖をつなぐフィンランドの国境案が出され<sup>21</sup>、フィンランド及びヴィエナ・カレリアの返還について交渉がなされたが、交渉途中の11月30日にスウェーデン国王カール12世が死去し、首相ヨーチも策謀にはまって捕らえられ、交渉はまとまらなかったという<sup>22</sup>。3年後のニースタット条約でスウェーデンはロシアにフィンランド南東部の都市ヴィボルグ（ヴィープリ）を含むカレリア地峡を割譲することになる。しかし、交渉役であった公使カーレ・イエッリンボリは「大フィンランド」を忘れることはなく、1741年に同志と共に「大フィンランド」実現を目指して行動したが、失敗に終わったという<sup>23</sup>。

記事の最後には「200年後に再びロシアとフィンランドの間で交渉が行われているが、何百年もの我々の夢が実現するのか。ヴィエナ（・カレリア）が返還され、フィンランドが拡大するのか、我々の祖国の国境は海から海へと到達するのか（括弧―筆者）。」<sup>24</sup>という言葉で締めくくられる。「何百年もの我々の夢」とは「大フィンランド」の実現を示唆する。以上のように、同記事では歴史的な話を持ち出してヴィエナ遠征の成功、すなわち「大フィンランド」の実現を望む主張がなされた。

さらに同年8月24日発行の第34号には、「勝利者の合唱団」と題する歌詞が掲載された。これは1918年8月11日にミッケリ地方および防衛地域の祭典で歌われた歌詞が掲載されたものである。以下に引用する。

我々は昼と解放の朝を得た！

我々は血の怒りから戦闘を追い出された

どのように父たちは自分たちの夢を追いかけたのか  
それを本当に我々は実現した  
そして古代の夢  
我々は遂に勝利を取めた

夜の権力、ポホヤの氷点下は  
今は春の力に勝っている  
そして新しい夏、解放を  
我々は強固な防衛だ

今、土地、義理の兄弟の  
どこで戦争は静かに猛威をふるうのか  
すでに野花と黄色の穂軸が運ばれるのに

我々を崩壊させることはできなかった  
何百年もの霜は消えたのだ  
今こそ触れよう、今こそ修正しよう  
大フィンランドの力量を！

台風に圧倒されない  
この国は、勝利は続く！  
我々は愛を築く  
それを誓おう！

我々は誓う 我々は誓う  
この勝利の平和が機能すると！  
我々の高い理想  
日の力に向かって！<sup>25</sup>（太字－筆者）

以上のように、1918年の『スオメン・クヴァレヒティ』には3箇所「大フィンランド」に言及した記述が見られ、いずれもヴィエナ遠征を支持する内容であった。しかし、遠征が失敗した後の1920年にタルトゥ条約が締結され、ヴィエナ・カレリアを含むロシア・カレリアでの自治が認められると、「大フィンランド」の実現の可能性はほとんどなくなった。同誌でも「大フィンランド」という用語

は消え、その後 1941 年まで見られなくなった。

## 2 ロシア・カレリアの表象

他方、ロシア・カレリアについての言及は東カレリア遠征が失敗に終わった 1920 年以降も定期的に登場する。なかでも、ロシア・カレリアの一部であるヴィエナ・カレリアに関しては、記事とともに写真がふんだんに掲載されていた。

それらを大きくわけて以下の 7 種類に分類した。

- (1) ロシア・カレリアの老人
- (2) ロシア・カレリアの女性、子供
- (3) ロシア・カレリアの風景（自然、建物等）
- (4) ロシア・カレリアにおけるフィンランド兵士
- (5) 『カレワラ』に関連して表象されるロシア・カレリア
- (6) ロシア・カレリアからの避難民
- (7) 史実に関連付けられたロシア・カレリア及び「大フィンランド」

付録の表で各記事からどの表象が見出せるのかを一覧にした。さらに一覧には (8) として「大フィンランド」の言葉自体が使用されているかを表に加えた。上記の分類で示した表象はそれぞれ混じって掲載されている場合があり、特に (5) は (1) ～ (3) に関連付けられて掲載される傾向が見られる。また、(3) と (4) も関連して掲載されることが多いので、以下、(1)、(2) を取り上げて他の項目との関連を取り上げ分析し、次に (3) と (4) を関連付けた形で同様に分析する。

### (1) ロシア・カレリアの老人

ロシア・カレリア、特にヴィエナ・カレリアに居住する老人、子供、女性の写真は 1918 年からほぼ毎年掲載されている。老人に関しては、『カレワラ』の歌い手本人、あるいは歌い手を想起させる写真が多く掲載されている。

例えば、1918 年 9 月 7 日発行の第 36 号の表紙はヴィエナ・カレリアに居住する老人の写真が一面に掲載されている（写真 1）。96 歳の老人は長い髭を蓄え、杖をついている。さながら、叙事詩『カレワラ』の主人公ヴァイナモイネンである。フィンランド民族文化を代表する叙事詩『カレワラ』は、生まれた時から老人の姿をした不滅の詩人ヴァイナモイネンを中心として展開される。ヴァイナモイネ



写真 1  
SK 1919, No. 36 表紙

ンは、19世紀後半に興隆した芸術運動カレリアニズム期に特に繰り返し絵画に描かれたが、そのほとんどは長い白髭を蓄えた老人の姿として描かれている。ヴァイナモイネンの想像図として最も有名なのが画家アクセリ・ガッレン＝カッレラが描いた絵である（写真2）。この絵がヴァイナモイネン像としてフィンランドに普及したと言っても過言ではない。同誌では、このヴァイナモイネン像と重なるカレリアの老人を中心に取り上げている。また、『カレワラ』の原詩である口承詩は民族楽器カンテレを弾きながら語られることが多く、同誌もしばしばカンテレ奏者のカレリアの老人を記事に取り上げる。



写真2

アクセリ・ガッレン＝カッレラ作  
《サンボの防衛》(1896年) 左の  
白髪の老人がヴァイナモイネン

1922年1月14日発行の第2号の記事「カレリアのカンテレ奏者が旅の途中で天国に」を見てみよう。この記事は75歳で亡くなったカンテレ奏者テッポ・ヤニスの追悼記事である<sup>26</sup>。彼は境界カレリア<sup>27</sup>の住民であり、厳密に言うとロシア・カレリアの住民ではないが、彼の写真（写真3）は1941年7月26日発行の第30号に挿入されている「東カレリアの本」特集の出版社の広告にも使われている（写真4）。つまり、彼の姿は東カレリア、すなわちロシア・カレリアを表象するアイコンとして使用されたのである。

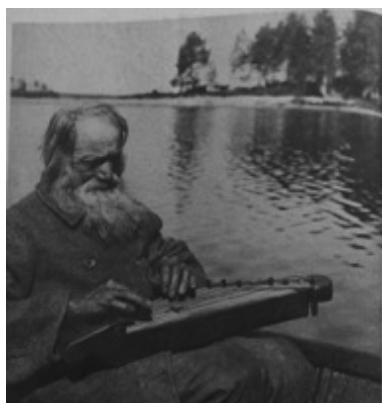


写真3 SK 1922, No. 2, s. 46.



写真4 SK 1941, No. 30, s. 1024.

類似する写真はその後も掲載される。1921年12月3日発行の第49号には「ヴィエナでの民族の勃興」と題するヴィエナ・カレリアの地域を写真と地図付きで紹介する。そこにも長い髭を蓄えた老人が孫と共に立っている写真が掲載されている<sup>28</sup>。

1935年2月23日発行の第8号は『カレワラ』特集を組んでおり、「カレワラの地の現在の詩の歌い手」と題した二人の老人の歌い手が表紙になっている（写真5）。また、「詩と美のカレリア」と題したカレリアの人々の写真が2面にわたって掲載されているが<sup>29</sup>、その中心はカンテレを演奏する白い髭の老人である。

このような白い髭の老人の紹介は続く。1936年9月3日発行の第35号では「カレリア人の想像力」という記事でカレリア人のイラストとその紹介がされているが、そこでラリン＝リボというロシア・カレリアの最後のカンテレ奏者を取り上げている。記事では筆者が彼の「ヴァイナモイネンの最後の子孫によるカンテレの響き」を聞いたと紹介している<sup>30</sup>。ラリン＝リボも白髭の老人として描かれている（写真6）。

つまり、ロシア・カレリアの老人はフィンランド民族文化のアイコンの一つである民族楽器カンテレ奏者を中心に、『カレワラ』の主人公ヴァイナモイネン像に重なる形で表象されていったのである。

## (2) ロシア・カレリアの女性、子供

カレリアの女性を特集した記事は、上記の老人像と同様に詩の歌い手、あるいは民族衣装を身にまとった女性に注目している点が特徴として挙げられる。子供も民族衣装を着た子供に焦点が当てられている。これらの女性や子供はフィンランドが「守るべき存在」としても表象されていった。

1919年6月28日発行の第26号に「アウヌスの写真」と題した短い記事には、農作業をするアウヌスの女性アンニが取り上げられている（写真7）。記事によると、ヴィエナ・カレリアでは男性がやる仕事を女性も行っているという。今年、男性は防衛に駆り出されたため、アウヌスの女性は男性の仕事を代わりにしなくてはならなかった。今年は春の種まきが遅れたのは共産主義当局が種を取り上げてし



写真5  
SK 1935, No. 8 表紙



写真6  
SK 1936, No. 35, s. 1294.



写真7  
SK 1919, No. 26, s. 100.

まったからだと批判する。最後に、地元はフィンランドから必要な量の種を得たと、フィンランドが救援したことを強調する<sup>31</sup>。

1921年2月26日発行の第9号ではラドガ湖北部に位置するスオヤルヴィのクイッカニエミにおいて催されたカレリアの伝統的な結婚式についての記事が掲載された(写真8)<sup>32</sup>。



写真8 SK 1921, No. 9, s. 168-169.

この記事は『カレワラ』の日を記念して、カレワラ協会発行の年次雑誌に掲載された「スオヤルヴィの遠征」を同誌に再掲したもので、同協会秘書で民俗学者のA. O. ヴァイサネン、民俗学者ヴァイノ・サルミネン、画家J. W. マッティラが昨年の夏にカレリアの伝統的な結婚式に参加した記録である。同記事には民族衣装をまとった女性の写真がふんだんに掲載されている。

他方、子供に関してはカレリアの伝統的生活を紹介する記事に写真が家族とともに掲載される、もしくはカレリア人難民の窮状についての記事に掲載される傾向が見られる。

前述したが、ヴィエナ遠征、すなわち東カレリア遠征部隊が完全に撤退した後、1920年にタルトゥ条約がソヴィエト・ロシアとフィンランド間で締結され、結果としてロシア・カレリアの自治が承認された。しかし翌年にソヴィエト側は約束を反故にし、ロシア・カレリアにソヴィエト制を敷き、それに抵抗したカレリア人を鎮圧した。そのため、一部のカレリア人が難民としてフィンランドに流入してきたのがこの時期に当たる。フィンランドでは「近親民族」であるカレリア人難民を救済しようと募金活動や寄付金付きの絵葉書販売などがなされるようになる<sup>33</sup>。

同誌でもカレリア人難民に関する特集が1922年に多く見られる。例えば、1922年9月9日発行の第36号で「フィンランドでの東カレリア人難民の子供たち」と記事が組まれ、記事には子供たちが避難先の東フィンランドにおいて勉強する姿や家事をする姿が掲載されている<sup>34</sup>。また、同年9月30日発行の第39号では南東フィンランドのキュミンリンナに居住するカレリア人難民の記事が掲載されたが、この記事にも子供たちの写真が全面に出されている<sup>35</sup>。

同誌では国境の向こう側で虐げられ、フィンランドに難民として避難してきた「近親民族」の救済を主張する一方で、その状況を生み出したソヴィエト・ロシア(ソ連)を暗に批判している記事が掲載されるなど、「近親民族」を虐げてきたソヴィエト・ロシア(ソ連)への反発も一部見出せる<sup>36</sup>。

また、『カレワラ』に関連した記事も多く見られた。例えば、1934年10月20

日発行の第43号の記事「カレリアの女性」では泣き歌の歌い手である85歳のホウリ・ムラネンの伝統的な生活を取り上げている<sup>37</sup>。以上のように、女性に関しては市井の女性の生活ぶりを記事に取り上げる傾向が見られる。

すでに上述した1935年2月23日発行の第8号の「詩と美のカレリア」では民族衣装をまとった女性、子供が掲載されるなど民族衣装が常に写っている<sup>38</sup>。

また、同号では「私の母とカレワラ」という記事でカレリア人と推測できる作者がエッセイを寄せる。作者によると、自分の母は読み書きができず、無学で、『カレワラ』自体について知らなかったが、祖父が信じていたカレワラに関連したことを学んでいたという。また母はキリスト教徒であったが、彼女の神は『カレワラ』の神ウッコを想起させた。母はカレワラの物語をたくさん語り、歌ってもくれたと幼い頃の思い出を語る。最後に、作者は以下の言葉で締める。「私の母はヴィエナ・カレリア出身の老いた婦人である。彼女は素晴らしい。何千人もの彼女の姉妹であるカレリア人女性がいることは驚くことではない。彼女らは喜び、悲しみ、比類のない愛において素晴らしい人たちである。詩人である。そして彼女らと彼女の夫は有したのである、カレワラを。」<sup>39</sup>

このようなカレリア人女性の暮らしぶりを伝える傾向は続く。1940年5月18日発行の第20号ではカレリアからフィンランドに居住した女性の日常について描写する際に雪が残っている湖で洗濯物を濯ぐ女性の写真を掲載し、カレリアでの生活を懐かしみながらフィンランドで慎ましく新生活を送っている2人のカレリア人女性の状況を視覚的に訴えている(写真9)<sup>40</sup>。



写真9 SK 1940, No. 20, s. 521.

### (3) ロシア・カレリアの風景(自然、建物等)及び(4) ロシア・カレリアにおけるフィンランド兵士

(1)、(2)と比較すると(3)の表象が全体を概観すると一番多く見られる。(4)については戦時中に記事が多く掲載された。また、単に写真にとどまらずその地を賛美する詩なども掲載されたが、それらの表象を時系列に見ていこう。

ヴィエナ・カレリア遠征が行われた時期である1918年にはヴィエナ・カレリアに関する記事だけではなく、読者の理解を助けるための地図も掲載された<sup>41</sup>。

7月6日発行の第27号に民俗学者ヴァイノ・サルミネンが記した記事「アウヌス・カレリアから」で彼は「アウヌスはフィンランドの近親民族の居住する地域の一つで、その民族は何百年もの間圧政者のくびきに耐えてきた」<sup>42</sup>と評し、

アウヌス・カレリアがロシアに圧政を受けてきたと非難する。他方、住民はフィンランドに属することを望んでいるとし、フィンランド人はアウヌスの住民についてほとんど知らないので彼らについて紹介するとし、住民の暮らしに言及し、自然の美しさにも触れる<sup>43</sup>。

最後にサルミネンは「カレリア民族のフィンランドへの連帯努力は将来の大きな可能性である。素晴らしい森と肥沃な山々はフィンランドの周縁を発展させ始めるであろう。」<sup>44</sup>と述べ、あたかもカレリアの住民側がフィンランドとの合併を望んでいると示唆する。加えて、同記事にはカレリア人への「近親民族」感情を誘うようなアウヌス・カレリアの風景と素朴なカレリア人の写真が掲載されている。翌1919年には実際に遠征した兵士とカレリアの風景が対で掲載される傾向が見られる(写真10)。

アウヌス・カレリアの表象は写真や論考だけにとどまらない。1919年3月1日発行の第9号には「アウヌス」という詩が掲載されるなど<sup>45</sup>、文化的にも表象されていたが、それらの表象が最も多く見られたのが1941年以降である。



写真 10

SK 1919, No. 25, s. 573.  
「アウヌスからの写真」と題して、兵士の様子やアウヌス・カレリアの風景の写真が紹介されている。

### 3 継続戦争期の「大フィンランド」表象

カレリアの風景が最も多く掲載された年は、フィンランドが国境を越えてロシア・カレリアへ進軍した二度目の対ソ戦争である継続戦争期であり、フィンランドが再び「大フィンランド」の実現を目指して軍事的に行動した時期であった。

1939年11月30日に勃発した第一次対ソ戦である冬戦争でフィンランド軍は善戦したもののソ連軍に勝利することはできず、1940年3月12日に締結されたモスクワ講和条約でカレリア地峡を始めとする国土の10分の1を失う<sup>46</sup>。つまり、「大フィンランド」の実現どころではなく、フィンランドはカレリア地峡という重要なソ連との隣接地を失ったのである。さらに、この地に居住していた42万人ものフィンランド人が避難民として国内に流入することになり、同誌に避難民、そしてカレリア地峡に関する記事が多く掲載されるなど話題は「失われたカレリア」に集中していった<sup>47</sup>。

1941年6月25日にソ連空軍がフィンランドの各都市を空爆したことにより、フィンランドで継続戦争と呼ばれる第二次対ソ戦が始まった。フィンランド軍は国境を越えカレリア地峡へと進軍し、9月には前年のモスクワ講和条約で失った

領土の奪還を果たす。フィンランド軍はさらに進軍し、旧国境を越えてロシア・カレリアを占領した。11月にラドガ湖とオネガ湖にまたがるスヴィリ川を少し越えた地域を最大進出地とし、塹壕を築き、占領地の防衛に力を注ぐ。つまり、この時点で暫定的であるが軍事的行使で「大フィンランド」を実現させたのである。

この1941年から同誌は、占領したロシア・カレリアの様子を頻繁に報じる。この時期に現地の写真がふんだんに掲載されるようになったのは、TK（宣伝部隊）が撮影した写真や記事が各新聞、雑誌に提供したからである。TKは継続戦争前の1940年に結成され、継続戦争期に従軍し、現地の写真や記事を書いたりプロパガンダ活動に従事したりした。TKに属する者はTKマン（TK-mies）と呼ばれたが、なかでも有名だったのが戦間期にヨーロッパ文化との連帯を謳った文化グループ「松明を掲げる者たち」の中心メンバーであったジャーナリストのオラヴィ・パーヴォライネンである<sup>48</sup>。パーヴォライネンは『スオメン・クヴァレヒティ』にもしばしば寄稿し、現地の様子を伝えた。

以上のような理由で、同誌にはロシア・カレリアに関連した記事が多く掲載された。その内容は戦争前と同様でカレリアの人びとの伝統を守る素朴な生活ぶり、自然の風景であり、そこに現地での兵士の様子が加わった（写真11）。

そのような記事の中で異色なものが、1941年8月9日刊行の第32号に掲載さ



写真11 SK 1941, No.41, s. 1345.  
フィンランド兵士と談笑しているのは「カレリアの解放で心から喜んでいるカレリア女性」

れた「モスクワの門にいるフィンランドの男性」という記事である<sup>49</sup>。同記事は16世紀のスウェーデン統治時代のフィンランド総督ピエタリ・ブラヘ（在位1637-40年、1648-54年）が「大フィンランド」を志向したという史実を取り上げた内容で、17世紀のスウェーデン膨張時代に焦点を当てている。記事によると、グスタフ2世アードルフが、プスコフ（エストニア東側に位置するロシアの都市）を占領できた暁には東にナルヴァ（現エストニアの都市）に新しい都市を作ろうとしたが、その時ブラヘ自身、東の国境を画定しようとし、その際にフィンランド人開拓者を利用しようと考えたという。1639年にブラヘが北フィンランドを旅行した際に書かれた記録によると、「フィンランド語は白海地域から10マイルくらいの範囲で話されているが、フィンランド人はアルハンゲリクス（現ロシア北西部の都市）近隣や遠くノヴァヤゼムリヤ（北極海に位置する島）やサーミ人とフィンランド人の起源となっているサモエード人（ロシア北部に居住する民族）の地域にもいる（括弧－筆者）。」<sup>50</sup>1652年にブラヘがピエルサルヴィ（現

フィンランド領カレリアの地域名)の端からリエクサ川までの河口に都市を建設したのは、白海と商業的結びつきを得ることが主な目的であった。1657年のカール10世の治世下、ブラヘは再び国境を東側に移動させようとしたという。次はロシア人と共同してロシアのラップランドもスウェーデンの手中に収めようとした。そして、さらに「小さいが十分に豊かな」アウヌスの地も手に入れようとしたという。国境線はラドガ湖まで引っ張るはずであったが、ロシアに近いのでスヴィリ川を残し、オネガ湖を通ってボヴェネツ(オネガ湖北に位置する都市)と白海までになった。つまり、ピエタリ・ブラヘはヴィエナ・カレリアを自国に引き入れようとしていたという説を説明している<sup>51</sup>。

同記事では、ブラヘはスウェーデン大国の支援と安全はスウェーデン人とフィンランド人にこそあると考えており、それゆえブラヘはフィンランドに注意を払い、フィンランドをよくしようとしてくれたという<sup>52</sup>。以上のように、同記事は17世紀の話をしなから「大フィンランド」という思想がすでにスウェーデン時代から存在することを示す内容となっている。以上のような歴史的出来事を語りながら、「大フィンランド」に言及する記事がこの時期に掲載されたことは珍しく、史実による「大フィンランド」の正統性を裏付ける試みが見られる。

しかし、圧倒的に多いのはフィンランド軍関係の記事であった。フィンランド軍がアウヌス・カレリアに駐屯している間、同誌はカレリアについての記事を多く掲載していった。10月4日には「アウヌスの人びとは解放を祝う」と題して、ソ連からの「解放」を祝っているとされる人びとの姿の写真を掲載している<sup>53</sup>。しかし、実際、フィンランド軍がロシア・カレリアを占領した時点で住民の大半はすでにソ連に避難していた<sup>54</sup>。そのような状況はフィンランドの大衆には知られることなかった。同年には「東カレリアの首都は我々のものだ」<sup>55</sup>と題する記事や「東カレリア人の運命」<sup>56</sup>と題し、同地の人びとの写真が掲載されるなど、戦争に関連した記事が寄せられる。

1942年に入ると、フィンランド兵士の様子を描いた記事と共にカレリアの人びとの姿の写真が多く掲載される中、クリスマスに刊行された第51、52号の合併号に「大フィンランドの朝」という楽譜が掲載された<sup>57</sup>。この楽譜はフィンランド人作家ヴィリヨ・コホが作詞し、作曲家のラウリ・イコネンが作曲したものである。歌詞の内容は「今、フィンランドは満開の時を迎えている」から始まる歌で「大フィンランド」という言葉は歌詞には使用されていないが、美しい国が朝を迎えるという歌になっている。このように楽譜や歌の歌詞が掲載されるなど、様々な表象が見られた。

1943年に入るとカレリア関連の記事自体が激減する。その一方で戦争前と同様に、ロシア・カレリアの人びとの素朴な暮らしが引き続き記事として掲載された<sup>58</sup>。

1944年2月にソ連軍が首都ヘルシンキを空爆し始め、フィンランド本土で被害が拡大していく中、フィンランドは3月から和平交渉を始めるが、交渉はうまくいかず4月に最終的に交渉決裂に終わった。その後、6月6日の連合軍によるノルマンディー上陸作戦の3日後に当たる6月9日に、ソ連軍はロシア・カレリアに駐留するフィンランド軍に一斉攻撃を仕掛ける。

その2ヵ月前の4月15日発行の第15号では「東カレリアの顔」と題して子供や若者の写真を2面にわたって掲載しているが(写真12)、その論調は戦前と変わらないものであった。



写真12 SK 1944, No. 15, s. 432-433.

## おわりに

以上のように、大衆誌『スオメン・クヴァレヒティ』に見られる「大フィンランド」の表象の分類・分析を行ったが、管見の限り同誌では「大フィンランド」という用語自体は1918年の3つの記事と1941年、1942年の記事にしか見られず、直接的な「大フィンランド」表象はほとんど見られなかった。

他方で、ロシア・カレリアの表象は連続してなされている。上述したように伝統を守るカンテレ奏者の白髭の老人、民族衣装を身にまとった女性や子供たちを写真とともに紹介し、彼らの日常を垣間見せることで「近親民族」感情を読者に引き起こさせた。また、カレリアの豊かな自然の風景の写真を繰り返し掲載することで、独立以前に花開いた芸術運動カレリアニズムと重なる形で「郷愁的」感情を読者に呼び起こす作用を果たしている。

継続戦争期には現地での兵士の様子もしばしば報告されているが、煽るような政治プロパガンダ的な記事は少なく、「近親民族」を救済、保護する兵士像が表象されていった。また、上記に記した読者の共感を生み出すような文化的な記事が引き続き多く見られた。他方、歴史的史実を「大フィンランド」に結びつけて、その正当性を主張する記事も少数であるが見られたが、そのような説明よりも読者にわかりやすく訴えかけられる写真や詩が圧倒的に記事として取り上げられた。

また、地域的なカレリアについての記載であるが、時にカレリアはロシア・カレリア、カレリア地峡といった地域ごとの厳格な区別がなされないままに一律に「カレリア」として取り上げられ、一様にフィンランドとの結びつきが強調されていった。

『スオメン・クヴァレヒティ』で見られた「大フィンランド」関連の表象は「大フィ

ンランド」の実現を目標に掲げている団体が発行する雑誌と比較すると<sup>59</sup>、その表現や表象は一見穏やかである。しかし、国境の向こう側の豊かで美しいカレリアの自然の中で生活している「近親民族」の日常を繰り返し紹介するという文化的表象を繰り返した同誌の影響は決して過小評価されるものではない。大衆誌によるこのようなカレリアの紹介は、「大フィンランド」の思想がフィンランドの

## 付録1 地図



出典：拙著 2012 年。

付録2 『スオメン・クヴァレヒティ』の「大フィンランド」表象に関する分類(記事、写真が対象、ただし広告は除く。また、基本的に旧フィンランド領カレリア、すなわちカレリア地峡、境界カレリアに関する記事も除くが、ロシア・カレリアと関連付けられた記事は表に含める)

- 1 ロシア・カレリアの老人
- 2 ロシア・カレリアの女性、子供
- 3 ロシア・カレリアの風景(自然、建物等)
- 4 ロシア・カレリアにおけるフィンランド兵士
- 5 『カレワラ』に関連して表象されるロシア・カレリア(『カレワラ』のみに言及される記事は除く)
- 6 ロシア・カレリアからの避難民(フィンランド人含む)
- 7 史実に関連付けられたロシア・カレリアや「大フィンランド」
- 8 「大フィンランド」の言葉の有無

発刊年	号数	題名	1	2	3	4	5	6	7	8
1918	25	ヴィエナ・カレリアの村に沿って		○	○					○
	27	アウヌス・カレリアから			○					
	33	ヴィエナの返還	○						○	○
	34	歌詞 勝利者の合唱								○
	36	表紙 ヴィエナ・カレリアの老人の写真	○							
	36	ヴィエナ・カレリアの地図								
	37	写真 防衛部隊のヴィエナ・カレリアへの遠征		○	○	○				
	39	ヴィエナ・カレリアでのフィンランド人の後退		○	○	○				
	40	ヴィエナの救済			○	○				
	40	詩 「小さなユッシ」の思い出に				○				
	42	なおヴィエナ・カレリアからの写真	○		○	○				
1919	9	詩 アウヌス								
	14	東側国境の向こうの軍事遠征			○	○				
	25	アウヌスからの写真	○		○	○				
	26	アウヌスの写真	○							
	32	楽譜 ヴィエナ・カレリアの歌								
	36	アウヌスの英雄の墓地				○				
1920	9	カレワラの地から		○	○	○				
	14	以前の国境の向こう			○	○				
1921	9	カレリア人の結婚式、生活の様子	○	○	○		○			
	27	ショット：ヴィエナの地からの物語								
	33	ヴィエナにおける民族の勃興	○	○	○					
	33	カレリアの前線からの最初の写真				○				
1922	1	カレリア民族の解放戦争		○	○	○				
	2	カレリア人のカンテレ奏者が旅の途中で天国へ	○				○			
	5	解放側からの東カレリア部隊				○				
	6	カレリア避難民の救済		○						
	36	フィンランドの東カレリア避難民の子供たち		○						
	39	キュミンリンナのカレリア避難民	○	○						
1923	35	境界カレリアの鉄道	○	○	○					
1925	7	境界カレリア訪問の写真日記について		○	○					
	11	我々の東カレリアの防衛において			○	○				
1926	48	カレリアのために！(難民救済のポストカード)						○		
1931	16	カレリア人の紳士	○	○						
1934	43	カレリアの女性		○						
	50	アウヌスの進歩におけるフィンランド			○	○				
1935	8	表紙 カレワラの地での現在の詩の歌い手達					○			
	8	詩と美しいカレリア	○	○	○		○			

発刊年	号数	題名	1	2	3	4	5	6	7	8
	8	私の母とカレワラ	○				○			
1936	23	アウヌスの戦争におけるウーノ・カイラス			○					
	35	カレリア人の想像力の力	○	○	○					
1940	14	ホームレスとしてのカレリア民族			○			○		
	15	カレリア人と彼の家	○	○	○				○	
	16	カレリアのエネルギー			○					
	16	詩 太陽が沈む土地への旅						○		
	16	地図 ムルマンスクへの道								
	20	カレリアの妻の視点		○				○		
	30	転出したカレリア人		○				○		
	32	東カレリアの顔		○						
1941	25	詩：国境で		○						
	25	アイトラハティでカレリアの村が復興						○		
	28	開放すべきロシア 東カレリア		○	○					
	28	カレリアは勃興する			○					
	29	国境が開いた			○	○				
	30	我々はフィンランドに加わる			○	○				
	30	ラドガにとっての強盗			○	○				
	31	我々は剣で国境を描く			○	○				
	32	モスクワの門にいるフィンランド人男性							○	○
	35	カレリアで見たロシア人口		○	○					
	36	詩：カレリア					○			
	36	詩：オネガ湖、白海へ			○					
	38	我々は再び教会に通う	○	○	○					
	38	国境はない				○				
	38	アウヌスは美しい		○	○	○				
	39	カレリアの風景 1941			○					
	39	ヴァラモ（ヴァラーム） カレリア人の視点から			○					
	40	カレリアの風景 1941 II			○	○				
	40	アウヌスの人びとは解放を祝う		○	○					
	41	戦闘、恐怖とその意味			○	○				
	41	再び戦う		○	○	○				
	41	東カレリアの首都は我々のものだ		○	○	○				
	41	アウヌス・ラジオ			○	○				
	42	ソヴィエト・イングリアの農民の生活		○	○					
	42	我々はシュヴァリへ行進する				○				
	42	ああ、家に帰る		○	○					
	43	レボラ、再建へ			○	○				
	43	我々の新たな国境のための生きる防衛壁			○	○				
	43	新たな勝利者たち	○	○	○	○				
	43	東カレリアの水車			○					
	44	彼らはこんなにたくさん			○	○				
	44	アーニスリンナ（ペトロザボーツク）我々の新しい都市			○					
	45	新たな我々のイエーガー隊				○				
	46	ヴェブス人も救うべきだ	○	○	○					
	46	詩：シュヴァリの歌			○					
	47	ラドガからシュヴァリへ		○	○					
	47	ザッラから東へ		○	○	○				
	49	東カレリアの顔		○	○	○				
	50	フィンランドはカレリアに権利を戻す							○	
	50	知られざるヴェブサ		○	○					
	51-52	東カレリア人の運命	○	○	○					
	51-52	シュヴァリの賛美歌			○	○				

発刊年	号数	題名	1	2	3	4	5	6	7	8
1942	2	エース：東カレリアでの連隊路		○	○	○				
	2	焼かれた村：カレリア出身	○	○						
	6	東カレリアの建物と礼拝堂			○		○			
	7	氷点下のアウヌスから		○	○	○				
	13-14	勃興するアウヌス：学びの道で		○						
	19	詩 シュヴァリの歌								
	19	作曲コンテスト（上記の詩に作曲するコンテスト）								
	19	オネガの顔		○	○					
	19	春はオネガに			○	○				
	19	アウヌスの春								
	20	春はオネガに II		○	○	○				
	21	アウヌスの歌う少女の物語	○	○						
	25	詩 クーヤルヴィの歌								
	25	カレリアは勃興する	○	○	○					
	27	遠くて近いカレリア	○	○	○	○				
	30	そこに我々は旅する			○					
	38	リモサーリ			○					
	39	一年で古いラドガ湖			○	○				
	41	フィンランドの ABC に関するヴェプスの子供		○						
	42	シュヴァリニスカの自治区			○	○				
	42	ラウリ・サンツツが描いた東カレリア	○		○	○				
	50	嘆きのアウヌスから			○	○				
	51-52	アーニスニエミのアイコンの絵	○							
	51-52	楽譜 大フィンランドの朝								○
1943	27	ペトロスコイ（ペトロザボーツク）の夏の計画			○	○				
	37	アウヌスの朝、昼、夜	○	○	○					
	39	モケイネン：古アウヌスの2組の夫婦	○	○						
	43	イングリシア人に感謝する	○	○						
1944	7	東カレリアについての真実		○						
	15	東カレリアの顔		○						
	25	表紙 カレリア難民の救済についての牧師の言葉						○		
	25	若いカレリア：歌、遊びと学び			○					
	30	最後？：降伏する直前のラドガのギリシャ正教会のミサ		○						
	43	カレリア人の視点からの住居問題						○		

大衆に深く浸透していく装置としてみるのではないかな。

#### 参考文献

##### 一次史料

*Suomen Kuvalehti* 1918-1944.

##### 二次史料

Manninen, Ohto, *Suur-Suomen ääriiviivat*, Helsinki: Kirjayhtymä, 1980.

Nygård, Toivo, *Suur-Suomi vai lähiheimolaisten auttaminen*, Helsinki: Otava, 1971.

Näre, Sari, ja Jennni Kirves toim., *Luvattu maa: Suur-Suomen unelma ja unohdus*, Helsinki: Jonny Kniga Publishing, 2014.

Paavolainen, Paavo, *Synkkä yksinpuhelu : Päiväkirjan lehtiä vuosilta 1941-1944*, Helsinki: Otava, 1963.

Vares,Vesa, ja Sakari Siltala, *Sanan ja kuvan vuosista: Suomen kuvalehti 1916-2016*, Helsinki: Otava, 2016.

石野裕子『大フィンランド思想の誕生と変遷—叙事詩カレワラと知識人—』岩波書店、2012年。

石野裕子「『大フィンランド』は祖国と同様である—エルモ・カイラとカレリア学徒会の地域構想」『地域研究』Vol. 16, No.1、京都大学地域研究統合情報センター、2015年11月。

石野裕子『物語フィンランドの歴史—北欧先進国「バルト海の乙女」の800年—』中公新書、2017年。

デイヴィッド・カービー著、百瀬宏・石野裕子監訳『フィンランドの歴史』明石書店、2008年。

付記 本稿は科学研究費助成事業（基盤研究（C）、課題番号15K02428）による研究成果の一部である。

#### 〈註〉

- 1 この思想は、フィンランドの民族文化の代表的存在である叙事詩『カレワラ』の原詩が主にロシア・カレリアで採集されたことがきっかけで発生した「近親民族」感情を基にしている。詳細は、拙著『大フィンランド思想の誕生と変遷—叙事詩カレワラと知識人—』岩波書店、2012年を参照。
- 2 ロシア・カレリアは北部のヴィエナ・カレリアと南部のアウヌス・カレリアに大きく分けられる。ヴィエナ・カレリアの主要都市はレボラ（レボルイ）、ボラヤルヴィ（ボロソゼロ）で南部分は白海に面している。アウヌス・カレリアの主要都市はペトロスコイ（ペトロザボーツク）で南部分はオネガ湖に面している。他方、フィンランド南東部に接したカレリア地峡と呼ばれる地域がある。この地はフィンランドの領土であっ

たが、第二次世界大戦後にソ連に割譲された。また、フィンランド領内にもカレリアと呼ばれる地域がある。なお、ロシア・カレリアはフィンランドでは「東カレリア」と表記されることがあり、戦時中はその表記が一般的であった。添付の地図を参照。

- 3 本文に記したように、「大フィンランド」の範囲自体は明確に規定されているものではない。また、論者によっては、カレリア人以外にもイングリシア人、エストニア人などを「近親民族」に含めることもある。
- 4 例えば、Toivo Nygård, *Suur-Suomi vai lähiheimolaisten auttaminen*, Helsinki: Otava, 1971, Ohto Manninen, *Suur-Suomen ääriiivat*, Helsinki: Kirjayhtymä, 1980, Sari Näre ja Jennni Kirves toim., *Luvattu maa: Suur-Suomen unelma ja unohdus*, Helsinki: Jonny Kniga Publishing, 2014. など。
- 5 創刊当初の発行部数は8,000部から12,000部だった。その後順調に部数を伸ばしていき、1918年には25,000部（うち定期購読数が19,500部）、1927年には11万部を発行した。しかし、1928年から32年まで続いた不況によって部数が落ち込み始め、1932年には82,860部になった。そのため、価格を85マルッカから65マルッカに下げる経営的判断がなされた。不況を脱した1934年には96,400部と徐々に部数が増えていった。現在は30万もの読者（電子版を含めると35万以上の読者）を有する。人口が550万（2017年）のフィンランドにおいては非常に広く読まれていると言ってよい。Vesa Vares ja Sakari Siltala, *Sanan ja kuvan vuosisata: Suomen kuvalehti 1916-2016*, Otava, 2016, s. 9, 15, 46, 82-84.
- 6 *Ibid.*, s. 15.
- 7 *Ibid.*, s. 16, 18.
- 8 *Ibid.*, s. 24.
- 9 なお、本稿ではカレリア学徒会といった「大フィンランド」実現を目標に掲げた団体の行動に関する記事は取り上げない。理由としては、主に儀式や祭典に関する記事がほとんどで、団体の主張が同誌で明確に示されているわけではないからである。
- 10 『カレワラ』はフィンランド人医師エリアス・ロンルートが口承で伝えられてきた物語を採集し、再構成し、1835年に出版された。1849年に再構成された新版が普及した。
- 11 拙著2012、19-38ページを参照。
- 12 同上、38-42ページ。
- 13 内戦は独立以前からの社会的分裂が軍事的衝突に発展した結果であった。臨時政府側の白衛隊と労働者側の赤衛隊との間で戦われたが、5月に白衛隊の勝利で終結する。なお、この内戦にはドイツ軍、ロシア義勇兵、スウェーデン義勇兵といった外国人兵士も参戦した。内戦の進展及び東カレリア遠征についての詳細は、拙著『物語フィンランドの歴史－北欧先進国「バルト海の乙女」の800年－』中公新書、2017年、107-114ページを参照。
- 14 この遠征は、東カレリア遠征と一般的に呼ばれるが、同誌では「ヴィエナ遠征」と表

記されることが多い。

- 15 当時、白衛隊総司令官グスタフ・マンネルヘイムが布告を發布し、この遠征を「命令」した経緯がある。
- 16 ヴァイサネン (A. O. Väisänen 1890-1969) は民俗詩を専門とする研究者で 1917 年から詩人エイノ・レイノ、民俗学者 E. N. セタラなどとともに同誌に寄稿している。  
Vares ja Siltala, *op. cit.*, s. 20.
- 17 *Suomen Kuvalehti* (以下、SK と略) 1918, No.25, s. 224.
- 18 *Ibid.*, s. 226.
- 19 *Ibid.*, s. 227.
- 20 SK 1918, No. 33, s. 383.
- 21 この案だとヴィエナ・カレリアだけではなくアウヌス・カレリアも含めた「大フィンランド」の範囲となる。
- 22 *Ibid.*, s. 384.
- 23 *Ibid.*, s. 385.
- 24 *Ibid.*
- 25 SK 1918, No. 34, ページ数記載なし。なお、「ボホヤ」とは叙事詩『カレワラ』に登場する地名である。
- 26 SK 1921, No. 2, s. 46.
- 27 境界カレリア (Raja-Karjala) は歴史的な地域名称でラドガ湖北部地域を指し、「ラドガ・カレリア」とも呼ばれた。この地およびカレリア地峡は、18 世紀に勃発したスウェーデン、ロシア間での戦争の結果、ロシアに割譲されていたが、ロシア帝国統治下に入った 1812 年にロシアがフィンランドに譲渡した地域でもある。その時はこれらの地域は「古フィンランド」と呼ばれた。境界カレリアは第二次世界大戦後にカレリア地峡とともにソ連に割譲され、現在はカレリア共和国の領土となっている。
- 28 SK 1921, No. 49, s. 1173.
- 29 SK 1935, No. 8, s. 313-314
- 30 SK 1938, No. 35, s. 1294.
- 31 SK 1919, No. 26, s. 100.
- 32 SK 1921, No. 9, s. 168-169. 厳密に言うと、この地はフィンランド領だった境界カレリアであるが、ロシア・カレリアとの一体性を論じているので取り上げた。
- 33 SK 1922 No. 6, s. 279. このタルトゥ条約締結に不満を抱き、ロシア・カレリアからの難民救済及び彼らの教育を目的として 1922 年 2 月 22 日に結成されたのが、戦間期最大の学生団体となるカレリア学徒会 (Akateeminen Karjala-Seura:略称 AKS) である。会はカレリア難民救済のためのポストカード販売や寄付金を募る活動を展開し、次第に「大フィンランド」実現を目標とした。詳細は、拙稿 2015 を参照。
- 34 SK 1922, No. 36, s. 870

- 35 SK 1922, No. 39, s. 952-3.
- 36 1918 年 5 月 24 日発行の第 21 号では「赤いペトログラードから」という題名で飢えた子供が物乞いしている姿や墓が荒らされている写真が掲載され、ソヴェエト・ロシア内部の窮状を報告している。SK 1918, No. 21, s. 486-7.
- 37 SK 1934, No. 43, s. 88.
- 38 SK 1935, No. 8, s. 312-3. 同号は『カレワラ』の日である 2 月 28 日を記念した『カレワラ』特集を組んでおり、同記事はその特集の一つであった。
- 39 *Ibid.*, s. 315.
- 40 SK 1940, No. 8, s. 520-521.
- 41 SK 1918, No. 36. ページ数記載なし。
- 42 SK 1918, No. 27, s. 268.
- 43 *Ibid.*, s. 268-272.
- 44 *Ibid.*, s. 272.
- 45 SK 1919, No. 9, s. 437.
- 46 この条約で、フィンランドは領土の割譲の他に軍事基地の貸与、賠償金の要求を受け入れた。
- 47 例えば、SK 1940, No. 13, s. 320-4. 「失われたカレリア」では、故郷を追われる避難民となったフィンランド人の姿が多く掲載されている。他には SK 1940 No. 32, s. 834-7 など。
- 48 パーヴォライネンは自身の従軍記者の経験記を戦後に出版したが、そこでは、自分を含む「大フィンランド」の理想を抱いて進軍したフィンランド人が、実際にロシア・カレリアの住民と接した際、自分たちが歓迎されていないことの違和感を綴っている。Paavo Paavolainen, *Synkkä yksinpuhelu : Päiväkirjan lehtiä vuosilta 1941-1944*, Helsinki: Otava, 1963.
- 49 SK 1941, No. 32, s. 1058-60.
- 50 *Ibid.*, s. 1059.
- 51 *Ibid.*, s. 1059-60.
- 52 *Ibid.*, s. 1059.
- 53 SK 1941, No. 40, s. 1310-11.
- 54 詳細は拙著 2017、164-66 ページを参照。
- 55 SK 1941, No. 41, s. 45-46.
- 56 SK 1941, No. 51-52, s. 1704-5.
- 57 SK 1942, No. 51-52, s. 1626.
- 58 例えば、1943 年 9 月 2 日発行の第 37 号では「アウヌスの朝、昼、夜」と題した記事では、人びとが漁に出ている姿や家を建設している姿、子供が牛の面倒を見ている姿など牧歌的な写真が掲載されている。SK 1941, No. 37, s. 1058.

59 例えば、戦間期最大の学生組織であり、「大フィンランド」実現を目標に掲げたカレリア学徒会では、「『大フィンランド』は祖国と同様である」とする言説を主張したり、『大フィンランドの詩』と題した詩集などを刊行したりしていた。拙稿 2015 を参照。